慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マニラ・ガレオン貿易における中国人の登場とその役割： フィリピンにおける中国系メスティーソの生成を中心に
Sub Title	The Manila galleon trade and Chinese in Spanish colonial Philippines
Author	李, 悳薫(Lee, Duk Hoon)
Publisher	慶應義塾大学出版会
Publication year	2015
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.58, No.2 (2015. 6) ,p.179- 197
JaLC DOI	
Abstract	マニラ・ガレオンとは, スペイン領東インド(現在のフィリピン)のマニラとヌエバ・イスパニア(ニュースペイン：現在のメキシコ)のアカプルコとの間を, 年1～2回太平洋を横断して行き来していたスペインの貿易船である。しかしマニラ・ガレオン貿易は, 単にマニラとアカプルコ間の貿易ではなく, 中国の絹とスペインの銀がそれぞれ中国とラテンアメリカから運ばれて取引されたことから, 世界貿易だったと言っても過言ではない。本研究は, スペイン植民地時代のフィリピンに焦点を当て, マニラ・ガレオン貿易の発展をたどりながら, この貿易に中国人が登場した背景, およびそこで中国人が果たした役割を明らかにする。加えて, マニラに移住した多数の中国人がスペイン政府によるたびたびの迫害にもかかわらず, なぜフィリピンに定着できたのかを考察し, 農業と漁業中心のインディオ(フィリピン現地人)と貿易と金融中心のスペイン人との間を取りもつ経済的存在としての中国系メスティーソの誕生がその背景にあったことを明らかにする。
Notes	渡部直樹教授退任記念号#論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20150600-0179

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
第58巻第２号
2015 年 6 月

2015年５月22日掲載承認

マニラ・ガレオン貿易における中国人の登場とその役割

――フィリピンにおける中国系メスティーソの生成を中心に――

李　　悳　薫

＜要　　約＞

マニラ・ガレオンとは，スペイン領東インド（現在のフィリピン）のマニラとヌエバ・イスパニア（ニュースペイン：現在のメキシコ）のアカプルコとの間を，年１～２回太平洋を横断して行き来していたスペインの貿易船である。しかしマニラ・ガレオン貿易は，単にマニラとアカプルコ間の貿易ではなく，中国の絹とスペインの銀がそれぞれ中国とラテンアメリカから運ばれて取引されたことから，世界貿易だったと言っても過言ではない。本研究は，スペイン植民地時代のフィリピンに焦点を当て，マニラ・ガレオン貿易の発展をたどりながら，この貿易に中国人が登場した背景，およびそこで中国人が果たした役割を明らかにする。加えて，マニラに移住した多数の中国人がスペイン政府によるたびたびの迫害にもかかわらず，なぜフィリピンに定着できたのかを考察し，農業と漁業中心のインディオ（フィリピン現地人）と貿易と金融中心のスペイン人との間を取りもつ経済的存在としての中国系メスティーソの誕生がその背景にあったことを明らかにする。

＜キーワード＞

マニラ・ガレオン貿易，中国の絹とスペインの銀，華僑，中国系メスティーソ，スペインの植民地の秩序

１．はじめに

東南アジアを研究して明らかになる共通点と言えば，それは植民地時代を経験したということと（タイを除く），華人（中国系現地人）が存在するという点である。今日，華人共同体は世界で最も経済的な影響力を持つ集団の１つである。特に東南アジア経済では中国系移民と彼らの後裔たちが重要な存在であり，経済的に影響力のある集団であることは言うまでもない。

このことはフィリピンにも当てはまり，全人口の1.5％に満たない華人が卸売，小売業界の上位1000社の総売上高の74％を握っており，国内資本の約50％の経済力を持っていると言われる[1)]。しかし，他の東南アジア諸国との特筆すべき相違点は，フィリピンには華人ではない中国系メス

ティーソ（Chinese mestizo）が存在しており，人口も2280万人で全人口の26％を占めているという点である。

上述したように，華人には中産層以上の上流層が多いが，その存在をスペイン植民地の副産物と見なす論者は多いものの，当時のフィリピンを世界経済システムから見る観点は少ない。

スペイン植民地時代のフィリピンでの中国人の登場は独特である[2)]。スペインのフィリピン征服後，首都になったマニラは，1571年以降，世界の貿易のハブとして発展しており，マニラ－アカプルコ間でおこなわれたマニラ・ガレオン貿易（Manila Galleon Trade）は，中国の絹とスペインのアメリカ植民地の銀との交換につながる世界経済システム，すなわちグローバル貿易の初期段階と見なされている。

マニラ・ガレオン貿易は，スペインの植民地であるマニラとヌエバ・イスパニア（ニュースペイン：現在のメキシコ）のアカプルコとの間でおこなわれた貿易である[3)]。この貿易は，絹が中国の福建からマニラを経由してスペインのアメリカ植民地に渡り，さらにそこからスペイン本国に運ばれ，他方，スペインのアメリカ植民地で産出された銀がマニラを通じて中国に運ばれる，いわゆる三角貿易の形態で発展した。

しかし，その三角貿易の前者に登場する絹貿易の主体は，中国人であった。スペインの植民地であった16世紀に，マニラは絹と銀の交易拠点となり，中国の福建からの帆船貿易によって中国商人がそこに定着するようになったのである。

そして，中国商人は当時のマニラの日常生活に必要なすべての物資と人，商品，交易などとサービスの供給を支配し，ヒト，モノ（絹），カネ（銀）がアジア，アメリカ，ヨーロッパを結ぶ16世紀のグローバル化が形成されていったのである。

本研究では，マニラ・ガレオン貿易が登場するようになった背景と中国の絹輸出と銀輸入の背景を踏まえて，中国人がフィリピンに定着するようになった経緯を明らかにしたい。このために，まず，第２節では，研究範囲と方法そして華僑と華人の定義を明確にする。続く第３節では，スペイン植民地以前のフィリピンと中国人の貿易関係を分析する。そして，第４節では，スペインのアメリカ植民地で産出された銀と中国産の絹の交易としてのマニラ・ガレオン貿易の誕生の背景を示し，さらに，第５節では，このガレオン貿易における中国人の登場とその役割を明らかにする。最後の第６節では，本論文の要約と結論が述べられる。

２．マニラ・ガレオン貿易に登場した中国人

２．１　研究範囲と方法

フィリピンでは香料や金や銀が生産されなかったため，16～17世紀には利益なき群島（profit-

1） Dannhaeuser, N.（2004）, p. 237. Overseas Compatriot Affairs Commission, R.O.C.（Taiwan）. 中華民國僑務委員會（台灣）2009.1.31.

2） Flynn, D. O. / Giráldez, A.（1995）.

3） Chuan, Hang-Sheng（1969）.

less archipelago）と呼ばれていたが，マニラ・ガレオン貿易で生ずる間接的な利益はとても大きかったと言える[4]。

先に，スペイン領フィリピン政府は生存戦略として同じスペインの植民地である南アメリカ地域の銀と中国の絹の中継貿易の拠点としてマニラを位置づけ，これへの対応としてマニラ・ガレオン貿易が登場した。

このガレオン貿易は，中国の明末期と清初期に当たる16～17世紀に成立した[5]。それは，スペイン植民地であるマニラと中国との絹と銀の交易と，南アメリカ地域と本国スペインの絹に対する好奇心によって発展した。

マニラ・ガレオンの絹交易は，陸上のシルクロードとは別に，スペインを経由してヨーロッパに大量の絹が移動した点が驚異的であり，海上のシルクロードと呼ばれている[6]。このような海上のシルクロードは，どのような流れでヨーロッパまでつながったのか。その答えは，絹と銀にある。

明の中期にマニラに絹を持ち込んだ福建商人による海上貿易は，マニラ・ガレオン貿易期に，フィリピン国内経済での中国人の役割を大きくした。特に，絹を通して，マニラ・ガレオンの役割がヨーロッパで大きく認識され，中国商人のマニラへの定着がますます進んだ[7]。

マニラ・ガレオン貿易期，すなわちスペイン植民地時代のフィリピンでの中国人の登場は，フィリピン史において重要な役割を果たしている[8]。スペイン植民地下のフィリピンを世界体制論的に見れば，華人は植民地の社会変容の重要な担い手なのである。

このような中国人の定着は中国人に対する脅威につながり，スペイン植民地時代のマニラでは，1603年から1686年までに，スペイン人による中国人の迫害や虐殺事件が起こった[9]。

しかし，このような迫害があったものの，どのような事件と政策を経て中国人がフィリピン社会に定着するようになったのかを示す研究は多くない。劉仁善（1990: 321）と池端雪浦（1970）は，スペイン領フィリピン政府が商圏拡大を阻止しようと３度の追放令を発令したと指摘している。

上述の論題を中心に，本研究では，マニラ－ガレオン貿易との関連を中心に，スペイン領フィリピン政府の政策を検討し，その第１の目的として，マニラ－アカプルコ間のガレオン貿易がどのように発展し，どのような理由でマニラ・ガレオン貿易に中国人が現れたのかを明らかにする。

第２の目的として，多数の中国人がマニラに移住しながらも迫害され，その後，いかなる政策と事件を経てフィリピンに定着するようになったのかを考察する。

さらに，本研究では，スペイン領アメリカとスペイン領フィリピンの間で成立した絹と銀の交易を中心として論じ，マニラ・ガレオン貿易でスペイン人とインディオ（フィリピン現地人）の

4） Bauzon, L. E.（1970）, p. 172.
5） Boxer, C.（1958）, p. 8.
6） Ma, D.（1999）.
7） Chin-Keong, N.（1971）.
8） Wickberg, E.（1964）, p. 66.
9） Ruiz-Stovel, G.（2009）.

間に経済的な存在として登場した中国人が，スペイン植民地時代のフィリピン社会に適応し，特別なフィリピン人である中国系メスティーソとして定着する過程を，経済的な流れから明らかにする。

2．2　華僑と華人，華裔に対する定義

一般的に，華人に対する研究は，中国の血統や文化を中心に見るのか，あるいは居住国を中心に見るのかによって見解が異なる。

戴国煇（1974: 223-224）は，華僑と華人に対する分析を中国社会経済史の方法的枠組みの中に位置づける必要があると主張し，日本歴史学研究会編集委員会（1988: 1-2）は，人の空間的移動は定住者の価値基準によって作られると主張した。

このような論理の妥当性は，東南アジアが西欧諸国の植民地になり，ヨーロッパ人と原住民の間の媒介として華僑や華人が登場したことによって証明されている。[10)]

松本武彦（1992: 243-261）は，第1に，中国の歴史に依拠して居住地の状況を考慮し，第2に，華人の問題を労動力の国際移動という観点から把握しなければならないと主張している。このような華人の適応論理よりもさらに関心を引くのは，華人の経済的自立であると言える。

例えば，華人の成長は，与えられた構造的環境間の相互作用という観点から説明され，従来は，華人資本を植民地統治構造が新たにつくり出した副産物と見る立場，すなわち外部環境要因グループが主だったが，最近では，華人資本や華人企業の成功要因を文化的要因で規定し，中国人の特性，価値観，そして文化に連結させて理解しようとする立場，すなわち内部環境要因グループが優勢になっている。[11)]

本研究のような中国人研究では，華僑，華人，中国系メスティーソなど，定義の必要な部分が多い。私たちが日常的に多用する華僑（華橋，Overseas Chinese）とは，中華人民共和国の中国共産党政府の定義によれば，中国大陸，台湾，香港，マカオ以外の国家・地域に移住しながらも中国国籍を持って暮らす中国民族を指す。

この定義によれば，華僑というのは，ただ一時的に国を離れ，いつかは中国に戻ることを暗示する言葉でもある。これに比べて華人（Ethnic Chinese）とは，居住国の国籍を取得した中国系住民を指す。[12)]そのため，居住国の国籍を取得しない華僑とは区別される。つまり，華僑は中国系移民をいい，華人は中国系移民の子孫をいう。そして，本論文で取り上げる中国系メスティーソ（Mestizo de Sangley あるいは Chinese mestizo）とは，中国共産党政府の定義によれば，フィリピン国籍を取得した中国系移民の子孫であるため，華裔という名称とともに使用する。

10）浜下武志（1985）.

11）Purcell, V.（1965）, Furnivall, J. S.（1967）. Redding, G.（1990）, Clad, J.（1989）.

12）Wu, Yuan-Li / Wu, Chun-Hsi（1980）, pp. 7-10. 可児弘明・斯波義信・游仲勲編（2002）．小林正典（2013）p. 98.

3．スペイン植民地以前のフィリピンと中国人の関係

15世紀以降，フィリピン諸島とカリマンタン，マルク諸島，ジャワ，スマトラ，マラッカ（ムラカ），そして中国南部との交流が活発になり，要路にあるマニラやスールー諸島のホロ島は貿易港として発展をとげた。スールーは，すでに15世紀初めに明朝に入貢していたが，マラッカとの中継地となっていたブルネイからイスラム教が伝わり，15世紀後半にはスルタンの王国が成立していた。

スペインの属国になる以前のフィリピンは，大部分が半共同体的（semi-communal），半奴隷的（semi-slave）社会体制であった。[13] フィリピンでは中央集権的な国家が一度も形成されなかったし，すべての制度の中で最も典型的な社会組織は，バランガイ（Barangay）という村落共同体であった。これは基本的な政治・経済的単位で，類似したその他の組職とは異なり，独立していた。

1400年ほど前に建国，太平聖代を謳歌した唐帝国（618–907）は，アジア大陸の支配者として君臨する世界帝国にまで発展した。全盛期には，ペルシア，アラビアを含む世界各地の商人たちが集まって世界商業の中心地になり，唐の商人たちは対外貿易の発展に伴って東南アジアや北アフリカまで進出した。世界中で「唐」は中国と同義で使われた。今でも多くの外国人が中国人を「唐人」と呼び，華人が多く住むチャイナタウンを「唐人街」と呼ぶことを見ても，唐の時代に中国人の海外進出がすでに成り立っていたことがわかる。

中国人の東南アジア移住に関わる最初の文献史料は，北宋時代の1119年に朱彧が編纂した『萍州可談』である。[14] 広州で何年か過ごす外国人を住唐，それに対して，海外へ行ってその年に戻って来ない中国人を住蕃と表現した。12世紀前後，中国人は，海上貿易を南シナ海から東南アジアにまで拡大し，この地域を南洋と呼んだ。中国では，国外からの侵略や国内の戦乱によって，民衆は故郷を離れて新しい地域での定着を求められ，また，他国に居住しながら戦乱や貧困を乗り越える伝統がある。沿岸地域ではこれを走水，北方では闖関東という。

特に，1279年にモンゴルが中国を征服した時，多くの中国人はベトナム，カンボジア，タイ，インドネシア，フィリピンなどに逃げた。ミャンマーとラオスには雲南出身者が多く，カンボジアとベトナムには広西出身者が多かったが，海を渡ってインドネシア，マレーシア，そしてフィリピンに移住するのは，たいてい福建と広東の出身者だった。[15]

また，中国人の海外進出の最大の力になったのは，中国の明初期におこなわれた鄭和の大遠征である。ムスリム家門出身の宦官鄭和は，皇帝（永楽帝）の命令を受けて1405年５月から1433年７月まで160余隻の船を率いて７度インド洋を探険した。延べ人員２万7000人を統率して18万5000km の距離を航海したこの遠征は，この地域を明の縄張とし，多くの商人たちの進出のきっかけになった。

13）李憙薫（2014b), pp. 246–247.
14）成田節男（1942), p. 49.　Reid, A. (ed.) (1996), pp. 10–17. Li, L. (1997).
15）Zhou, M. (2006).

特にフィリピンに対しては，鄭和の遠征当時，明は60余隻の船を率いて３度征伐をおこなった。[16] 一部の学者たちは，この時期に中国人がフィリピンに定着したと考えている。しかし，1430年代，明の永楽帝が逝去して洪熙帝が即位し，儒教政治が成り立つと，宦官による政治から官僚政治に変化した。したがって，宦官であった鄭和も権力の中心から遠ざかり，その後の中国は，海洋よりも大陸に勢力を限定し，東南アジアなどの外部世界に門を閉ざすようになった。

15世紀初めは，ヨーロッパ諸国が東南アジアに進出する以前であり，中国商人が東南アジアの港市を拠点に活動して中国産の絹や陶磁器などを直接交易した時期であったため，貿易のためにマニラやマラッカなど東南アジアの旧都市に居住する必要があり，中国人コミュニティの存在も必要だった。[17]

明の張燮の『東西洋考』５巻によると，すでに鄭和の大遠征後から，フィリピンに居住する中国人がいた。フィリピンのマニラに長期滞在する中国人は，圧冬と表現されたが，圧冬にはマニラで冬を送る人という意味があり，長期滞在の中国人貿易商と見なされる。[18] この時期には長期に滞在する中国人は存在していたものの，そこに定住する中国人はあまり多くなかったと言われている。

４．マニラ・ガレオン貿易――銀と絹の交易

フィリピン史において，スペイン植民地時代とは，スペインがフィリピンを征服した1571年から，アメリカ・スペイン戦争でフィリピンに対する支配権がアメリカに委譲された1898年までの時期をいう。フィリピンを初めてヨーロッパに知らしめた人物は，スペイン王室の支援を受けて世界一周に出発したポルトガルの航海者マゼラン（Ferdinand Magellan）であった。

1521年にマゼランがサマール（Samar）島に上陸した後，1566年に，レガスピ（Miguel López de Legazpi）がフィリピンの大部分のバランガイ（Barangay）の族長を掌握するのに成功した。遂には，ビサヤ（Visaya）とルソンに，最初の植民地を「カトリックの十字架の下」に築いた。そして，この島国の国名を，当時のスペイン国王フェリペ２世（Felipe II）の名にちなんでフィリピン（Philippines）と定め，マニラに総督を置き，以後333年もの間続いた植民地支配を始めた。

初代フィリピン総督（1565–72）には，レガスピが任命された。[19] しかし，フィリピンでは，スペインが期待していた香辛料や，新大陸で発見された金や銀などの貴金属の鉱産物は発見されなかった。そのため，植民地統治によって取り立てた収入だけでは，カトリックの布教，遠征，戦争などの費用を賄うことができなかった。このような状況でスペインの活動を経済的に支えたのが，マニラ－アカプルコ間をつなぐガレオン貿易であった。

スペイン植民地統治下のフィリピン諸島におけるガレオン貿易期（1565–1815）は，国際貿易の

16） 大韓民国外交通商部（2011）.
17） 庄国土（2001）, pp. 40–45.
18） 宮原暁（2013），第５章.
19） 池端雪浦（1970）.

誕生と認識されるほど，東西洋の物品が行き交った時期でもある。特に，この時期における中国人の商業活動と定着は，その後の中国系メスティーソの登場とも関係が深い。また，この時期のスペイン領マニラ政府の中国人商人への理解や葛藤も他の時期とは違う。

マニラ・ガレオン（Manila Galleon）と呼ばれるフィリピンのマニラと，中南米のスペイン植民地アカプルコの間で成立したガレオン貿易は，1565年から始まり，1815年まで250年にわたって毎年２隻（後期には１隻）で編成され，スペインに莫大な利益をもたらした[20]。マニラ総督たちは，在任期間が短かったにもかかわらず，マニラ－アカプルコ貿易帆船（Manila-Acapulco trade Galleon）の船主として，また商人に貿易の権利を分配する行政官として，巨額の富を蓄積できた。16世紀後半から19世紀初めにかけて，中国やその他の隣国の商品を運んだマニラ－アカプルコ貿易は，植民地中央政府とその利権に関わったカトリック教団に直接的に大きな収益をもたらした。

ポルトガルが1557年にマカオを獲得して中国貿易で莫大な利益をあげると，スペインも中国との交易を狙い始めた。1571年にフィリピンの首都をセブ島からルソンのマニラに移転したのと同時に，難破した中国船を救助したことをきっかけに，絹を中心とした陶磁器などの商品が中国からマニラに持ち込まれ，マニラ・ガレオンは国際貿易へとつながった。

1565年に，マニラ・ガレオンの最初の開拓船として認識されているサン・パブロ（San Pablo）号が，桂皮（cinnamon）などの香辛料を積んでヌエバ・イスパニアに向かった。宣教師ウルダネタ（Andres de Urdaneta）は，太平洋北部（北緯39度30分）まで北上して，偏西風を利用して３ヶ月半かけてメキシコのアカプルコに到着し，マニラ・ガレオンの東航路を拓いた（柳沼 , 2012: 215）。アカプルコからマニラへの西航路（帰路）は，東航路ほどの時間がかからず，貿易風を利用してマリアナ諸島を通ってフィリピンへ帰還した。この航路は，16～18世紀の東西洋の貿易において最も重要なルートとされている。

1571年に首都をマニラに移したのは，他でもない中国貿易を目的とした戦略的行為だった[21]。当時のマニラは，中国貿易にも適していたが，戦略的にも重要な位置にある港であった。

中国の絹は，1571年にアカプルコに持ち込まれると，銀の生産によって経済力を高めたヌエバ・イスパニアやペルーで，大変な人気となった[22]。マニラに戻る際には，中国の明王朝で通貨として必要とされた銀を持ち帰り，マニラ・ガレオン貿易は三角貿易の形態で急速に発展した。したがって，1571年にスペインが物資集散地としてマニラを建設する以前にはアメリカ－アジア間の交易ルートはなかったと言われるが，このような三角貿易の形態から，グローバル化は1571年に始まったと言える。マニラ・ガレオン貿易の始まりは，1565年と見るよりも，中国の絹と南アメリカの銀の交易が始まった1571年と見るのが妥当であろう。

アダム・スミスによると，世界貿易を刺激したのは銀であり，その中心的な役割を果たしたのは中国だという[23]。

20） 伊藤禎一（1992）, p. 168.
21） Barker, Th. W.（2004）, p. 16.
22） Flynn, D. O. / Giráldez, A.（2006）．李憙薫（2014a）, p. 268.
23） Smith, A.（1981）, p. 207.

「新大陸の銀は中心商品の１つと考えられる。これによって旧世界の両端のヨーロッパと中国の間の貿易が成立し，これにより，２つの遠く離れた地域は太いパイプで互いにしっかりとつながっている。」

上述したように，新大陸アメリカの銀がフィリピンに流入したため，マニラは，アジア，アメリカ，そして本国スペインを結ぶ中継地の役割を果たすようになった[24]。1573年には，２隻のガレオン船が，アカプルコに中国の絹712箱と陶磁器２万2300個を運んだ。マニラの中国人たちが，中国の明で通貨として必要な銀を持ち帰り，ガレオン貿易は急速に拡がった。1574年には６隻，1575年には12隻の中国のジャンク船が，マニラに商品を運んだ。1591年から1780年のマニラ・ガレオン貿易の収入は，フィリピンの年間経常費の10～15％に当たるほど莫大であった。実際には，この収入の多くは，新大陸から中国への銀の供給と中国の絹に対するヨーロッパの需要によって本格的に生じるようになったと言える。アジアの絹は世界で愛される商品であったが，大量生産できるのは中国だけだった。

中国が銀を輸入するようになった背景には，14世紀末に紙幣（baochao）を本位貨幣として標準交換手段に定めた明の貨幣政策の失敗がある。当時，宝鈔（baochao）の過度な発行によって，中国紙幣の価値は銅や銀といった通貨と比べて暴落した。

1570年には，明が「単一貨幣（single-whip）制度」である一条鞭法への改革を実施し，各種の税金は全国的に統一され銀だけで支払う税制が確立された[25]。中国は当時の世界人口の４分の１を占めている上，周辺の国々との朝貢関係があったため，一条鞭法制度により，アジア地域はもちろん，インド，イスラム，そしてヨーロッパまでこのような貿易制度でつながった。

中国経済は非常に巨大なため，銀を決済手段にしたことで中国での銀の市場価格は，アメリカ，日本，そしてヨーロッパなどよりもずっと高くなった[26]。16世紀初め，中国での金銀比価は１：６であり，インド（１：８），ペルシア（１：10），ヨーロッパ（１：12）などと比べても銀の価値が高いことがわかる。このように，相対的に金の価格が低く銀の価格が他の地域の２倍近くであった中国に，銀が集まることは当然と言える。

新大陸の銀がフィリピンに流入する一方，マニラ・ガレオン貿易船は，スペイン領アメリカに絹を運んだ。絹こそが，当時のヨーロッパやスペインにおいて最高の商品だったからである。1393年に，明政府が桑の木を栽培するすべての農家の土地税を免除したため，桑の木栽培農家が増加して中国の絹の生産量は急激に増加した。

1550年頃の絹産業を代表する都市であった蘇州では，絹の産業人口が約50万人に達したほどである[27]。明王朝も王室絹工場に関心を持っていたが，清王朝では，絹産業が国家産業として認められるほどに発展した。蘇州の王室工場でも，明王朝では織機が173台，織工が504人であったが，

24） 山田義裕（2011）．Phillips, C. R.（1990）．
25） Hamashita, T.（1994）．
26） Glahn, R. v.（1996）．
27） Atwell, W. S.（1977）, pp. 22–26. Shih, Min-Hsiung（1976）. Chuan, Hang-Sheng（1975）, pp. 100–101. Souza, G. B.（1986）．

清王朝に代わり，1685年になると，織機が800台，織工が2330人と４倍以上に増加した。そして，杭州，南京，そして蘇州という絹産業の盛んな３都市を合わせれば，1863台の織機があり，7000人の織工がいたと言う。このような明末期から清初期の絹産業の発展は，西洋の産業化の成功以前に見られた世界的な巨大産業の一つと言える。17世紀のポルトガルの歴史学者ボカロ（Bocarro）によれば，17世紀の中国では年間2500トンの絹が生産され，そのうちの３分の１に当たる800トンが海外に輸出された。

このようにビッグマーケットであった中国は絹を独占生産でき，一方，スペイン帝国は銀が豊富だったため，銀と絹を媒介にしたスペイン－アジア間の交易は当然のことであった。[28] 1493年から1850年までの間には，アメリカスペイン植民地で約12万8153トン（メキシコ６万3657トン，ボリビア３万5064トン，ペルー ２万9432トン）の銀が生産された。当時の世界全体の生産量は14万9827トンであり，アメリカの生産量がその80％以上を占めていた。

一方，ヌエバ・イスパニアでは銀の生産費用が下がり，中国の絹がさらに脚光を浴びるようになる。[29] 1579年には，ヌエバ・イスパニアでの生糸の価格は40年前の価格の約７倍以上に高騰した。当時，マニラからヌエバ・イスパニアまでの絹の輸送から得られる平均利益率は，投資額の100～300％にのぼったと言う。

スペインは，このような海上貿易を基礎として，アジア，アメリカ，そしてヨーロッパを含む世界的な市場システムを形成した。しかし，スペイン国内の産業は発展していなかったため，新大陸からスペイン国内に流入した資金は，再投資されることなく消費に向けられた。

スペインは，中国の銀需要の急増とそれに伴う銀価格の上昇によって，アメリカの銀から多くの利益を得たが，銀が供給過剰となり，価格が下落すると，大きな打撃を受けた。[30] すなわち，アメリカから輸入した銀の価値が下がったため，銀で納められる税収が購買力低下につながり，スペイン王室は，経済破綻に陥った。また，1762～64年のイギリス軍によるマニラ占領はスペイン帝国の衰退を暗示し，世界的な自由貿易の流れを受け，スペインは，1778年に「自由貿易勅令」を出し，植民地と植民地，本土と植民地の間の貿易を自由化し，大部分の港を開港したため，アジアへの商品供給における特権は消え，競争力も失った。さらに，産業革命の始まったイギリスと海上強国オランダが登場したことにより，ガレオン貿易も衰退した。

マニラ・ガレオン貿易は，18世紀以降，銀と絹の世界的な交易から，生態学的交易に変わったと見られる。[31] 18世紀中葉になると，中国で人口が劇的に増加したが，これは生態学上の変化によって加速した。というのも，マニラ・ガレオン貿易によってヌエバ・イスパニアからじゃがいも，ピーナッツ，とうもろこしなどの救荒作物が持ち込まれ，それによって飢饉が抑制されたからである。例えば，上海近郊ではピーナッツが栽培され，福建の沿岸地域ではじゃがいもが，華南地方ではとうもろこしが大量に栽培された。

28）山田義裕（2011）p. 22.
29）Kim, Dong-Yeop（2012）, p. 67.
30）Frank, A. G.（1998）. 伊藤禎一（1992）, p. 169. ソウ・サンチョル（2013）, p. 148.
31）Crosby, A. W.（1972）, p. 199.

このように，銀の時代に始まった西欧人との出会いと接触による西半球社会（アメリカ）との交易は，銀と絹よりも人類の大きな助けになった。18世紀以降アメリカから太平洋地域にもたらされた生物環境上の影響を，マクニール（John McNeill）はマゼラン交易と呼んでいる。[32)]

18世紀後半以降，マニラ・ガレオン貿易は，銀と絹から，より利益率の高い砂糖，大麻，コプラ（copra），インディゴ（indigo）その他の多くの作物の輸出に取って代わられた。このような輸出は，多くの国々の貿易船によっておこなわれた。この傾向は，19世紀においても一貫していた。スペイン植民主義のために，植民地には，このような輸出作物の大規模耕作が課された。最後のガレオン船は1811年にマニラを発ち，1815年に，アカプルコを発ってマニラに帰還した。これにより，約250年間にわたるマニラ・ガレオン貿易は，終わりを告げた。

5．ガレオン貿易における中国商人の登場とその役割

植民地フィリピンの最高法規と言えるレコピラシオン（Recopilacion）によって，フィリピンに居住するスペイン人にのみ，ガレオン貿易に参加できる独占的な権限が与えられた。[33)] すなわち，スペイン本土のスペイン人，メキシコや他のアメリカ植民地のスペイン人たちは，マニラ－アカプルコ間のガレオン貿易に参加できなかった。当時のフィリピンのスペイン商人たちは，独占的な船主連合体を設立運営し，一種の貿易組合である強力なレアル・コンスラード（Real Consulado）をつくって貿易を支配した。この貿易組合は，マニラの富裕層や影響力のあるスペイン人，そして教会，軍隊，または植民地政府の代表者で構成されていた。もちろん，エンコメンデロス（encomenderos）と呼ばれる平民たちも，スペイン法の規定によってこの貿易に携わることができた。

一方，ガレオン貿易期のフィリピンにおけるスペイン人の直接的な貿易相手は，東南アジアで活動する中国人であった。[34)] それは，レコピラシオンに明示された現地人の住居制限規定によって生じたフィリピン国内交易の空隙に入り込んだのが中国人だったからである。彼らは，スペインによる植民地支配以前からマニラ近くのバランガイ（Barangay）を中心に活動していたが，1570年代にガレオン貿易が本格的に始まったことで，その規模をますます拡大した。

両国の貿易は1574年から1575年の間に確立され，以後1580年まで，年40～50隻の「ジャンク（中国商船）」が入港した。商業的な目的（期待）を持った数多くのメキシコ商人たちが，フィリピンに彼らの居住地を建設し，貿易や経営を専門的に監督した。

また，多くのアジア諸国の船舶もマニラに入港した。[35)] スペイン支配下の港は外国船舶（商船）に開放されなかったが，周辺アジア諸国との通常貿易のための船舶の入港は，初期にはフィリピン政府の黙認の下に，そしてスペイン征服後にはスペイン王朝の承認の下に許容された。時には，

32） McNeill, J. R.（1999）.
33） パク・ソンウ（2003）, pp. 7–8. ソウ・サンチョル（2013）, p. 140.
34） パク・ソンウ（2003）, p. 17.
35） Legarda, B. Jr.（1955）, p. 347.

ヨーロッパ船舶がマニラに入港するためにアジア国家の国旗を掲げることもあった。

交易品は「ガレオン」船によって東方に運ばれたが，その種類は非常に多様であった。例えば，ペルシア毛氈，インドの高級木化，象牙の加工品，碧玉（緑色の宝石），ひすい（玉），黄銅，香辛料，峡香鹿，家具，鉱物，陶磁器製品，土器，真珠，漆などである。公式には禁止されていたにもかかわらず，時には奴隷も交易品に含まれた。

しかし，このうち最も重要な品は，中国の「絹」であった[36]。絹はすべての中国商船に積まれ，メキシコ商人にとって交易品の中で最も珍しいものでもあった。したがって，16世紀にマニラに集まったすべての外国船舶や商人の中で，中国の船舶や商人が最も重要な存在であった。

フィリピンでの中国人の増加に関しては，レガスピによる統治が始まった1571年には150人，1588年には１万人，1603年には３万人，1748年には４万人という統計がある（周南京，1993: 86）。中国人がこのように増加したのは，マニラ・ガレオン貿易の成立によって，絹の供給のために中国の福建省の帆船貿易がマニラと有機的につながったからであった[37]。

福建の沿岸地方の中国人は，マニラに首都が移転された後，重要な交易相手がインディオ（フィリピン現地人）からスペイン人に代わり，彼らの日常生活に必要な物資を供給するようになった。一方，マニラ・ガレオン貿易が開始され，メキシコのアカプルコへの中継輸出となる絹や陶磁器などの商品を大量に扱うようにもなった。スペイン領マニラは，中国の南シナ海交易圏に近い港の１つに過ぎなかったが，当時のスペイン世界と中国世界の金銀交換比率の差を背景に急速に発展し，福建商人が駐在する帆船貿易と密接につながった。

フィリピンにおける中国系人口を統計的にはっきりさせることは容易でないが，約80～90％が福建省の出身，約10％が広東省の出身であり，福建系が圧倒的に多い[38]。中でも，晋江（Jinjiang）出身者が多く，その割合はフィリピン華僑全体の３分の２にのぼるという見解もある。

フォーブスの富豪ランキングトップ40において，ここ何年間も１位を維持しているヘンリ・施（Henry Sy，中国人 : 施至成）も晋江出身であり，２位のルシオ・タン（Lucio Tan，中国人 : 陳永栽）も晋江近くの出身である。

フィリピンでは，晋江は，橋郷（華僑の故郷）と呼ばれている。これには，この地方は人口が多いが土地は狭く，食糧不足で海外に出稼ぎに行くしかなかったという背景がある。フィリピン中国系移民の中に晋江出身者が圧倒的に多いのは，東南アジア華僑移民史でも珍しい現象である。

マニラ・ガレオン貿易は，中国や日本などのアジア諸国，フィリピン，そしてスペイン領メキシコを結ぶ三角貿易の形態であった。主に福建出身の中国人が輸出する絹や陶磁器などの物品が，メキシコやペルーで生産される銀と交換され，銀と絹がスペイン本国に移動するようになった[39]。

この時期の中国人のマニラ渡航に関する資料によれば，1580年代には，年30～40隻の帆船（ジャンク）が福建，広東からマニラにやって来るようになり，こうした中国帆船は３月初めに

36） Schurz, W. L.（1939）, p. 32.
37） 菅谷成子（2000）, p. 439.
38） 庄国土（2011）, p. 2.
39） Corpuz, O. D.（1997）.

出発し，季節風を利用して15～20日をかけてマニラに到着，そして，南西季節風が吹き始める5月頃に帰還したと言う[40]。

マニラ・ガレオン貿易期にフィリピンに定着した民族が，中国人（Sangley）であった。彼らは，初めからフィリピン現地人とスペイン植民地政府，そしてカトリックとムスリムの中にあって事業はおこなったが，植民地行政には干渉せず，中間商人の役目を果たした。中国人は，ガレオン貿易とスペインマニラ政府の維持にとって必須不可欠な存在であると同時に，脅威でもあった。

そのため，マニラ政府は，城壁都市イントラムロス（Intramuros）の外側に中国人居住地域パリアン（parian）を建設して，中国人の移住の禁止と徴税に都合のよい政策をとった[41]。1594年には，マニラのビノンド（Binondo）地区に，中国人カトリック改宗者のための新しい居住地域がつくられた。ところが，中国人移民者に対する改宗政策は成功したとは言えず，現実にはカトリック信仰を強制しなかったため，中国人異教徒集団の新しい居住地域が形成されただけであった。

しかし，貿易がますます発展し，17世紀の交易シーズンには，中国人人口がスペイン人を上回り，当時の東南アジアとしてはもちろん最大規模となる約2万人が定着したため，マニラは当時世界最大のチャイナタウンになった。

スペインの統治者は，中国商人の急増を恐れ，中国人移民に課税したり，異教徒として圧迫したり，搾取したりした[42]。それに対して，中国人移民はたびたび一揆を起こした。1574年には林鳳一揆，1593年には潘和五一揆，1603年にはマニラ一揆，1639～40年にかけてはカランバ（Calamba）一揆，そして1686年には丁哥一揆が起こった。

例えば，1603年のマニラ一揆では，マニラに居住する中国系移民の3分の2に当たる2万5000人が命を落とし，その後，1640年，1662年，1687年，1762年と，スペイン統治時代だけでも5度にわたる中国系移民の虐殺事件が発生した[43]。原因は中国人の急激な増加にあったが，その増加は，スペイン人が作業労動を軽蔑し，現地人もこのような作業労動に慣れていなかったために，中国人がほとんどすべての職業を占めるようになったことによる。例えば，中国人移民労動者は，漁夫，植木屋，狩人，織工，ビョックドルゴング，石灰製造者，木工，製鉄職工，裁断師，製パン業者，肉屋，キャンドル製造者，塗装工，銀細工業者，ベーカリー，薬剤師，反物屋，彫刻家，食堂，鍵製造工など，日常生活に必要なほとんどすべての職業を占めていた。

このような状況は，スペイン政府やインディオの反中国感情をかき立て，中国人に対する迫害につながった[44]。これに対する中国人の対応は，有効なものであった。1603年の大虐殺事件は，その後1年間のマニラの経済不況につながり，ガレオン貿易が麻痺した。

上述のことからわかるように，スペイン統治下のマニラ政府にとって中国商人は重要な存在になっており，中国人殺しは失うものが大きかったため，幾度もの迫害にもかかわらず，中国商人は増加した[45]。中国人虐殺は，5度も実行されたが，そのほとんどがスペイン統治期の前半に集中

40） 松竹秀雄（1989）.
41） Lorelei, D. C. De Viana (2001), pp. 10-18.
42） 周南京（1993), pp. 83-84.
43） 小林幹夫（1992), pp. 117-118. Wickberg, E. (1964). Reed, R. R. (1967), p. 137.
44） Ruiz-Stovel, G. (2009), pp. 49-50.

している。1637年には，中国人人口は約２万人に達していたが，13年後の1650年には，マニラの中国人は１万5000人で，1637年よりも5000人減少した。その理由は，1640年の中国人虐殺事件にあった。しかし，1650年当時のマニラに住むスペイン人が7350人，現地インディオが２万124人という調査を見れば，中国人の割合は非常に高く，その数がスペイン人の２倍程度だったことがわかる。

一方，17世紀中葉に金銀交換比率が世界的に平均化されると，新大陸市場での生糸や絹などが従来の競争力を失い，３大陸を行き交うガレオン貿易の世界での魅力がなくなり，マニラもその経済力を失い始めた[46]。また，マニラ・ガレオン貿易を支えてきた福建商人のマニラ交易も縮小して，マニラに住む中国人も減少した。歳入の８割をパリアン地区に依存していたマニラ財政は悪化し，1645年，1654年，1658年には地震の被害も被った。さらに，1661年には，清が，台湾の鄭氏政権を圧するために，人々を海岸から内陸に強制的に移動させて彼らが明の残存勢力を助けられないようにする遷界令を発した。これは，単純に海に出られないようにするという水準を超え，内陸への強制移住政策となった。遷界令によって，マニラを通っていた中国帆船もマニラ・ガレオン貿易も大きな打撃を受けた。このような流れを端的に示すマニラにおける中国人の居住許可税と人口を見てみよう。

表１のマニラの中国人の居住許可税徴収額が示すように，1637年には２万3750人がマニラに居住していたが，1661年に遷界令が発せられるとマニラ居住の中国人は減少し，1661年に7527人，1680年には2122人となった。しかし，1684年に遷界令が解除されると，再び中国人移民が定着し，1706年には4000人近くまで増加した。

この時期のマニラ・ガレオン貿易船がメキシコからマニラに持ち込んだ品の中には，タバコ，とうもろこし，砂糖，そしてカカオがあった[47]。1648年には，セブ近郊のタリサイ（Talisay）とバニラド（Banilad）のアウグスティノ修道会が農場でカカオを栽培していたという記録がある。

カカオは，輸出主力の商品になることはなかったが，高級植栽として生産された。カミン（Tomas de Comyn）は，1810年の記録の中で，カカオはフィリピン全土で最高の品質を誇り，コロンビア産に匹敵するほどだと述べている[48]。

中国系メスティーソとは，中国人の父と，フィリピン現地人（インディオ）の母を持つ中国系の混血を指す[49]。このような存在が税制上の区分として明確に規定されたのは，フィリピン諸島を含むスペイン植民地の啓蒙主義的植民地改革がおこなわれた18世紀中盤であった。

中国系メスティーソの登場には，ブルボンの改革が関係している。ブルボン改革の背景として，1700～13年の王位継承戦争でスペイン王室がハプスブルク王朝からブルボン王朝に代わったことを知っておかなければならない[50]。ブルボン王朝のカルロス３世は，18世紀中葉，無気力状態になっていたスペイン植民地に対する統治を強化するため，「ブルボン王朝の改革」を実行した。

45）　池端雪浦・生田滋（1977）．Phelan, J. L.（1959）, p. 178.
46）　池端雪浦・石沢良昭・後藤乾一・石井米雄・加納啓良編（2001）, p. 223.
47）　Fenner, B. L.（1985）, p. 47.
48）　Fenner, B. L.（1985）, p. 69.
49）　PNA（Philippine National Archives）, Gremios de naturales, mestizos, y chinos, 16-5-5.

表１　マニラの中国人の居住許可税徴収額

年	徴収額（peso）	人口	年	徴収額（peso）	人口
1620	16,973	2,121	1661	60,221	7,527
1630	87,606	10,950	1671	17,884	2,235
1635	147,000	18,376	1680	16,975	2,122
1637	190,000	23,750	1690	18,441	2,305
1640	59,906	7,486	1700	22,975	2,849
1650	50,603	6,324	1706	31,335	3,917

出典：池端雪浦・石沢良昭・後藤乾一・石井米雄・加納啓良編（2001），p. 224

その骨子は，植民地の行政や経済体制に対する統制を強化して制度を整備することにより，王室の収入を増大させ，植民地での統治体制を強固にすることだった。

何よりも，中国人に依存した植民地経営，すなわちマニラ・ガレオン貿易体制から脱却することで銀の中国への流出を防止するという基本方針が採用された[51]。1755年，アランディア（Pedro Manuel de Arandia）総督（在任1754-9）が実施した，カトリック教徒でない中国人の追放は，中国人移民社会に大きな転換を迫った。

植民地経済の実権をスペイン人に集中させるための第１段階として，植民地経済の中国人への依存度を低下させることはもちろん，植民地に住む中国人を減らすことを目的として，カトリックへの改宗を義務化したのである。第２段階としては，中国人移民が担っていた商品流通に，スペイン人，中国系メスティーソ，そしてインディオを参加させて，スペイン主導の植民地経済を成立させようと考えた。さらに，16世紀以降の中国との帆船貿易を担ってきた中国人を，異教徒（infieles）とカトリック教徒（cristianos）に区分する方針を立てた。

このような方針に対して，中国人移民社会は植民地支配の伝統的原理だったカトリック教会の支配を受け入れて，その一人一人が，洗礼や婚姻を通じて，スペイン国王の臣下として植民地社会の構成員になった[52]。

外国人である中国人がカトリックの洗礼を受けてフィリピン人として認められたことは，イギリスのマラヤ植民地時代の中国父系の混血華人であるババ，オランダ植民地時代のインドネシアの混血華人であるプラナカン，そしてフランスのインドシナ支配時のベトナムの混血華人であるミンフォン（明鄉）とは異なる特別なことであった[53]。すなわち，中国系メスティーソは特別なフィリピン人として認められたため，ホセ・リサール（Jose Rizal），エミリオ・アギナルド（Emilio Aguinaldo），アンドレス・ボニファシオ（Andres Bonifacio）などの中国系メスティーソは，フィリピン人として，スペインの支配から脱するために革命を通じて独立国家の形成を目指す

50）Astigueta, B.（2000）, pp. 60-61.
51）菅谷成子（2012）.
52）Escoto, S. P.（2000）.
53）Wickberg, E.（1964）, p. 66.

フィリピンナショナリズムを主導した。

しかし，プラナカン，ルーク・チン（タイの混血華人），ミンフォンなどの他の東南アジアの中国系メスティーソは，植民地の中間層として経済力を蓄積するだけで満足していた。このことを考えれば，フィリピンの中国系メスティーソが，フィリピンの近代史において，政治，経済，社会，文化の中心にあったことは珍しく，これには，特別な外国人として特別なフィリピン人に転換したことが重要な働きをしたと思わざるを得ない。

タイやベトナムなどの仏教国家では，政治的，経済的には混血華人のリーダーが登場したが，仏教の宗教的なリーダーは登場しなかった。また，イスラム圏のマレーシアやインドネシアでも，混血華人の政治的，経済的リーダーは存在したが，イスラム教の宗教的リーダーは輩出されなかった。しかし，カトリック国家フィリピンで最も人気のあった故シン（Jaime Lachica Sin: 辛海梅 ; Xi Haime）枢機卿が中国系メスティーソだという事実は，フィリピンでの中国系メスティーソがすでに18世紀には宗教的な媒介者としても登場していたことを反映している。

18世紀以降，カトリックに改宗した中国人は，理念的には，スペイン国王の臣下となり，スペイン植民地フィリピンの正統な構成員としてのフィリピン人（華人，中国系メスティーソ）になった。一方，改宗しない中国人は，スペイン国王の権威に従わない異教徒中国人（sangley infiel）として，植民地社会でさまざまな制限を受けた[54]。その結果，中国人の数が著しく減少し，彼らの住居もマニラに限定されたため，中国人の経済活動は一時衰退した。しかし，スペインの対フィリピン政策や中国人の追放令などの実施において，中国人とフィリピン人の混血であるメスティーソは，フィリピン人に準ずる取り扱いを受けたため，フィリピン経済を一時的に掌握した。

一方，福建地方から毎年マニラにやってくる異教徒中国人のために，パシッグ（Pasig）地域の河川にアルカイセリア・サンフェルナンド（Alcaiceria de San Fernando）という新たな宿泊施設がつくられた。彼らは，原則として，アルカイセリア収容所に収容され，交易を終えると中国に帰国しなければならなくなった。

アランディア総督によるカトリック教徒でない中国人の追放政策では，カトリック教徒の中国人移民と，異教徒中国人滞留者が厳格に区別されたため，スペイン領フィリピンのすべての中国人がカトリック信者となり，カトリック化が果たされた[55]。このアランディア総督による追放政策から55年が過ぎた1810年には，総人口252万7298人のうち，インディオすなわちフィリピン現地人が239万5677人で全人口の94.8％を占めたが，中国系メスティーソは，12万621人で全人口の約4.77％を占めるほどに増加した。1815年になると，マニラ・ガレオン貿易も終わり，1821年には，メキシコが独立を果たし，メキシコ副王によって統治されていたフィリピンは，スペインによって直接統治されるようになった。しかし，マニラ－福建間の貿易は継続し，フィリピン経済史の研究者ロース（Dennith Morrow Roth）によれば，19世紀初めには，マニラの食糧供給の取引や流通の担い手が中国人から中国系メスティーソに代わり，ラグナ（Laguna）州とパシッグ川を往来して商品が流入したとされている。また，ビノンドの町には，800店の衣類などを扱う店舗が

54） 劉仁善（1990）, p. 321.
55） 菅谷成子（2005）, pp. 20–24. Craig, A.（1916）. Roth, D. M.（1977）, pp. 90–96.

あったが，こうした問屋の主人も中国系メスティーソだった。そして，1834年のマニラ開港以後の社会変動によって，中国系メスティーソを中心とするフィリピン人の新興中産層が現れた。

パク・ソンウ（2003: 1–34）は，スペイン植民地フィリピンの土着支配階級の形成過程を，世界システム（world-system）の観点から概念化し，植民地の社会経済体制の内的変化にうまく適応した中国系メスティーソが土着支配階級の核心的構成要素となり，スペイン人に対抗できる唯一の土着経済集団に成長したことを強調した。

言い換えれば，中国人移民は，カトリックへの改宗により，フィリピン人としての待遇を受けてフィリピンで新たな階層を形成し，このことをきっかけとして，中国系メスティーソは，後にフィリピンの中国系を代表する集団となり，さらに，フィリピン近代史において政治，経済，社会での重要な役割を占めるようになったのである。

6．結論

フィリピンでは，スペイン統治以前，中国人やアラブ人などとの貿易で中国商人が短期的に滞留することもあったが，マニラ・ガレオン貿易によって多くの中国人が定住するようになった。マニラ・ガレオン貿易の成立は，単なるスペイン植民地フィリピンと，スペイン植民地メキシコのアカプルコの間の貿易ではなく，銀を渇望していた中国を含めた世界貿易の誕生だったと言っても過言ではない。マニラ・ガレオン貿易は，世界史に登場する絹と銀の交易を通して，重商主義スペインの帝国主義的発想と南米，アジアが共同で成り立たせた貿易である。すなわち，それは，単なるスペイン植民地内の交易ではなく，初期のグローバル化を成したヨーロッパ人，アジア人，南米人が総体的に統合された世界貿易の流れとして捉えられなければならない。

一方，絹を扱う福建商人がマニラとの間でおこなった中国帆船貿易により，中国人の定着と居住が始まって２万人ほどが滞留したが，スペイン政府は中国人の増加を脅威と見なして５度の大虐殺をおこなった。また，清の遷界令の布告によって，中国帆船貿易が停滞したが，遷界令の解除後には華人の定着に歴史的な変化が起こった。例えば，中国商人は，マニラ・ガレオン貿易のために渡航して中国人移民になったが，中国人移民の増加はスペイン政府の不安と圧迫につながり，中国人を含む外国人住民にはカトリックの信仰が義務づけられた。アランディア総督によるカトリック教徒でない中国人の追放政策によって，スペイン領フィリピンのすべての中国人がカトリック化され，中国人はメスティーソへと転換していった。

すなわち，外国人として扱われた中国人が，カトリックを信仰する新たなフィリピン人となったのである。カトリックに改宗した後，フィリピンの中国移民社会で中国系メスティーソと呼ばれる新階層が誕生し，マニラ・ガレオン貿易の中心になったが，このことは，改宗しなかった中国人の追放と深く関係している。

マニラ・ガレオン貿易の絹の供給者として登場した中国人は，中国系メスティーソでなければフィリピンに定住できなかったため，中国系メスティーソがフィリピン経済を掌握するようになった。同時に，植民地社会経済体制の変化にうまく適応した中国系メスティーソが，土着支配

階級の核心的構成要素となった。このような変化は，マニラ・ガレオン貿易と深く関係しており，中国人と中国系メスティーソの登場も，初期のグローバル化に当たる世界的な歴史的事件だと言える。

参 考 文 献

池端雪浦（1970）「フィリピンにおけるモノカルチュア経済成立の史的考察：マニラ開港を端緒とする」『アジア経済』11巻4号，pp. 70–89.

池端雪浦・生田滋（1977）『東南アジア現代史Ⅱ』山川出版社.

池端雪浦編（1999）『東南アジア史　Ⅱ　島嶼部』山川出版社.

池端雪浦・石沢良昭・後藤乾一・石井米雄・加納啓良編（2001）『岩波講座　東南アジア史〈4〉　東南アジア近世国家群の展開：18世紀』岩波書店.

伊藤禎一（1992）『東南アジアの経営風土』白桃書房.

可児弘明・斯波義信・游仲勲編（2002）『華僑・華人事典』弘文堂.

金東燁（2011）「15–16世紀東南亜海上貿易の特性と変化：ポルトガルの進出と影響を中心に」『東南アジア研究』21巻2号（韓国東南亜学会），pp. 1–23.

小林正典（2013）「フィリピンの中国系移民と中国との関係：福建から香港ルートへの傾斜と教育・言語の問題を中心に」『和光大学現代人間学部紀要』6巻，pp. 97–113.

小林幹夫（1992）『新東南アジア華人事情』日中出版.

周南京（1993）「中國和菲律濱的歷史關係」呉文煥編『菲律濱與華人』菲律濱華裔青年聯合會.

庄国土（2001）『華僑華人与中国的関係』広東高等教育出版社.

庄国土（2011）「1970～1990年代の晋江籍フィリピン華人社団の変化および原籍地との関係」（玉置充子訳）日本大学経済学部中国・アジア研究センター Working Paper No. 33.

菅谷成子（2000）「18世紀中葉フィリピンにおける中国人移民社会のカトリック化と中国系メスティーソの興隆」『東洋文化研究所紀要』139号（東京大学東洋文化研究所）pp. 420–444.

菅谷成子（2005）「18世紀末葉のスペイン領マニラ：「マニラ公正証書原簿」からみた植民地社会における中国人」『愛媛大学法文学部論集 人文学科編』No. 18, pp. 15–32.

菅谷成子（2012）「「トンドの謀議」をめぐる一考察：スペイン領フィリピン成立の断章」『愛媛大学法文学部論集人文学科編』32号，pp. 33–54.

ソウ・サンチョル（2013）「三角貿易：アカプルコ－ガルレオン貿易の誕生と没落」『Asian Journal of Latin American Studies』26（2）, pp. 131–157.

大韓民国外交通商部（2011）『フィリピン概況』大韓民国外交通商部文書番号11–1260000–000212–14.

戴国煇編（1974）『東南アジア華人社会の研究（上）』アジア経済研究所.

成田節男（1942）『華僑史』蛍雪書院.

日本歴史学研究会編集委員会（1988）「人の移動から歴史を見る」『歴史学研究』第581号，pp. 1–2.

パク・ソンウ（2003）「スペイン植民地支配下のフィリピンの形成過程」『東南アジア研究』13巻1号（韓国東南亜学会），pp. 1–34.

浜下武志（1985）「近代アジア貿易圏における銀流通：アジア経済史像に関する一構想」『社会経済史学』51巻1号，pp. 54–90.

増田義郎（1999）「ポルトガルとアジア（1）」『国際関係紀要』第8巻第2号（亜細亜大学国際係研究所），pp. 35–37.

松竹秀雄（1989）「タイオワン（台湾）をめぐる17世紀の海外貿易」『東南アジア研究年報』第31巻，pp. 25–68.

松本武彦（1992）「華僑研究の現段階：特に日本における近年の成果を中心に」辛亥革命研究会編『中国近代史研究入門：現状と課題』汲古書院，pp. 243–261.

宮原曉（2013）「「華僑」「華人」と東アジアの近代」大阪大学中国文化フォーラム編『現代中国に関する13の問い：中国地域研究講義』OUFC ブックレット 第1巻，pp. 85–108.

柳沼孝一郎（2012）「スペイン帝国の太平洋覇権確立：海外領土拡張政策と東アジア進出の歴史背景」『神田外語大学紀要』第24号，pp. 203–223.

山田義裕（2011）「マニラ・ガレオン」日本海事史学会2011年９月例会.

李恵薫（2014a）「グローバル貿易としてのマニラガレオン貿易と中国人と日本人の交易」『日本文化学報』62輯（2014年８月），pp. 259–286.

李恵薫（2014b）「スペイン植民地時代のフィリピンにおける中国系メスティーソ（mestizo de Sangley）の登場と役割」『東南アジア研究』24巻２号（2014年11月）（韓国東南亜学会），pp. 239–280.

劉仁善（1990）「フィリピンの歴史と文化：フィリピン近代史の成立と展開過程」『亜細亜研究』40巻1号（高麗大 亜細亜問題研究所），pp. 305–346.

Astigueta, B.（2000）「ラテンアメリカの独立へ：第二部　独立運動の推進思想」『上智大学外国語学部紀要』第35号（上智大学），pp. 55–81.

Atwell, W. S.（1977）, "Notes on Silver, Foreign Trade, and the Late Ming Economy," *Ch'ing-shih wen-t'i*, Vol. 3, pp. 1–33.

Barker, Th. W.（2004）, "Silver, Silk and Manila. Factors Leading to the Galleon Trade," in: I. D. E. A. S. Journal（http://www.paclas.org.ph/PAPERS/Tremml.pdf）.

Bauzon, L. E.（1970）, "Deficit Government: Mexico and the Philippine Situado（1606–1804）." Duke University: Ph.D. dissertation.

Boxer, C.（1958）, "The Manila Galleon, 1565–1815: the Lure of Silk and Silver," *History Today*, Vol. 8.

Chin-Keong, N.（1971）, "The Fukienese Maritime Trade in the Second Half of the Ming Period — Government Policy and Elite Groups' Attitudes," *Nanyang University Journal*, 5:1971, pp. 81–100.

Chuan, Hang-Sheng（1969）, "The Inflow of American Silver into China from the Late Ming to the Mid-Ch'ing Period," *The Journal of the Institute of Chinese Studies of the Chinese University of Hong Kong*, Vol. 2, pp. 61–75.

Chuan, Hang-Sheng（1975）, "The Chinese Silk Trade with Spanish-America from the Late Ming to the Mid-Ch'ing Period," in: Thompson, L. G.（ed.）, *Studia Asiatica Essays in Asian Studies in Felicitation to the Seventy-fifth Anniversary of Professor Ch'en Shou-yi*. San Francisco: Chinese Material Center, pp. 99–117.

Clad, J.（1989）, *Behind the Myth: Business, Money and Power in Southeast Asia*. London: Unwin Hyman.

Corpuz, O. D.（1997）, *An Economic History of the Philippines*. University of Philippines Press: PNA（Philippine National Archives）.

Craig, A.（1916）, *The Former Philippines Thru Foreign Eyes*. Project Gutenberg Release #10770.

Crosby, A. W.（1972）, *The Columbian Exchange: Biological and Cultural Consequences of 1492*（*Contributions in American Studies #2*）. Greenwood Press.

Dannhaeuser, N.（2004）, *Chinese Traders in a Philippine Town*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

Diaz-Trechuelo, L.（1966）, "The Role of the Chinese in the Philippine Domestic Economy（1570–1770）," in: Alonso F. Jr.（ed.）, *The Chinese in the Philippines 1570–1770*, Vol. I, Manila, pp. 206–208.

Escoto, S. P.（2000）, "A Supplement to the Chinese Expulsion from the Philippines, 1764–1779," *Philippine Studies* 48（2）, pp. 209–34.

Fenner, B. L.（1985）, *Cebu Under the Spanish Flag, 1521–1896: An Economic-Social History*, Cebu City, Philippines: San Carlos Publications.

Flynn, D. O. / Giráldez, A.（1995）, "Born with a 'Silver Spoon': The Origin of World Trade in 1571," *Journal of World History*, Vol. 6 No. 2, pp. 201–221.

Flynn, D. O. / Giráldez, A.（2006）, "Globalization Began in 1571," in: Gills, B. K. / Tompson, W. R.（eds.）, *Globalization and Global History*, London: Routledge.

Frank, A. G.（1998）, *ReOrient: Global Economy in the Asian Age*. University of California Press.

Furnivall, J. S.（1967）, *Netherlands India: A Study of Plural Economy*. Cambridge University Press.

Glahn, R. v.（1996）, *Fountain of Fortune: Money and Monetary Policy in China, 1000–1700*. University of California Press.

Hamashita, T.（1994）, "The Tribute Trade System and Modern Asia," in: Latham, A. J. H.（ed.）, *Japanese Industrialization and the Asian Economy*. London: Routledge.

Kim, Dong-Yeop（2012）, "The Galleon Trade and Its Impact on the Early Modern Philippine Economy,"『東西研究』24（1）, pp. 55–84.

Legarda, B. Jr.（1955）, "Two and a Half Centuries of the Galleon Trade," *Philippine Studies,* Vol. 3, No. 4, pp. 345–372.

Li, L.（1997）, "Mass Migration Within China and the Implications for Chinese Emigration," in: Smith, P.（ed.）, *Hu-*

man Smuggling: Chinese Migrant Trafficking and the Challenge to America's Immigration Tradition. Washington: The Center for Strategic and International Studies, pp. 23–47.

Lorelei, D. C. De Viana (2001), *Three Centuries of Binondo Architecture 1594–1898: A Socio-Historical Perspective*. University of Santo Tomas Publishing House.

Ma, D. (1999), "The Great Silk Exchange: How the World was Connected and Developed," in: Flynn, D. O. / Frost, L. / Lantham, A. J. H. (eds.), *Pacific Centuries*: *Pacific and Pacific Rim History since the Sixteenth Century*. London: Routledge, pp. 38–69.

McNeill, J. R. (1999), "Islands in the Rim: Ecology and History In and Around the Pacific, 1521–1996," in: Flynn, D. O. / Frost, L. / Lantham, A. J. H. (eds.), *Pacific Centuries: Pacific and Pacific Rim History since the Sixteenth Century*. London: Routledge, pp. 70–84.

Phelan, J. L. (1959), *The Hispanization of the Philippines: Spanish Aims and Filipino Responses, 1565–1700*. University of Wisconsin Press.

Phillips, C. R. (1990), "The Growth and Composition of Trade in the Iberian Empires, 1450–1750," in: Tracy, J. (ed.), *The Rise of Merchant Empires: Long-Distance Trade in the Early Modern World, 1350–1750*, Cambridge University Press, pp. 34–101.

Purcell, V. (1965), *The Chinese in Southeast Asia*. Oxford University Press.

Redding, G. (1990), *The Spirit of Chinese Capitalism*. Berlin and New York: De Gruyter.

Reed, R. R. (1967), *Hispanic Urbanism in the Philippines: A Study of the Impact of Church and State*, University of Manila.

Reid, A. (ed.) (1996), *Sojourners and Settlers: Histories of Southeast Asia and the Chinese*. St. Leonards: Allen & Unwin.

Roth, D. M. (1977), *The Friar Estates of the Philippines*. Albuquerque: University of New Mexico Press.

Ruiz-Stovel, G. (2009), "Chinese Merchants, Silver Galleons, and Ethnic Violence in Spanish Manila, 1603–1686," *Análisis,* Vol. 12, pp. 47–63.

Schurz, W. L. (1939), *The Manila Galleon*. New York: Dutton.

Shih, Min-Hsiung (1976), "The Silk Industry in Ch'ing China," *Michigan Abstracts of Chinese and Japanese Works on Chinese History*, Vol. 5.

Souza, G. B. (1986), *The Survival of Empire: Portuguese Trade and Society in China and the South China Sea, 1630–1754*. Cambridge University Press.

Smith, A. (1981), *An Inquiry Into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. Indianapolis: Liberty Fund.

Wickberg, E. (1964), "The Chinese Mestizo in Philippine History," *Journal of Southeast Asian History*, Vol. 5, No.1, pp. 61–100.

Wu, Yuan-Li / Wu, Chun-Hsi (1980), *Economic Development in Southeast Asia: The Chinese Dimension*. Stanford, Calif.: Hoover Institution Press.

Zhou, M. (2006), "The Chinese Diaspora and International Migration," *Social. Transformations in Chinese Societies*, 1: 2006, pp. 161–190.

［韓南大学（韓国）］